

第1分科会

協同で地域をつくる

宮崎 隆志 (北海道大学教育学部)

司会

小田 清 (北海学園大学経済学部)
高原一隆 (札幌学院大学経済学部)

コメンテーター

木村 純 (名寄短期大学)
野村朋子 (市民生協コープさっぽろ)

報告

川崎 克 (農業・健康・環境を考えるオホーツクネットワーク事務局長)
「生産者と住民のネットワーク化と地域づくり」
平間信雄 (豊富町兜沼小中学校)
「21世紀をになう青少年の健全育成をめざして」
横井寿之 (剣淵北の杜舎)
「豊かな地域生活の実現をめざして」
木村隆広 (道央市民生協)
「道央市民生協と美々川せっけん」

I. はじめに

この分科会では教育や福祉、健康や環境に関する問題の解決を図りながら、同時に協同活動として地域づくりに取り組んでいる諸実践に焦点をあて、地域づくり運動の発展論理とそこでの協同活動の意義について検討することを目的とした。以下では、まず報告して頂いた内容を要約し、続いてコメント・討論の概要を紹介した後に、簡単な総括を行うこととする。

II. 実践報告概要

生産者と住民のネットワーク化と地域づくり
川崎克 / 農業・健康・環境を考える
オホーツクネットワーク

「オホーツクネットワーク」は2年前に設立されたが、その前に「オホーツク地域調査研究会」を継続してきた。1982年に結成されて以来、「地

域問題の解決のためには、日々の実践にとどまらず、そこで生活する住民がたとえ粗末なものであっても責任をもって担わなければならないという考え」のもとに研究会を積み重ねており、そのなかで地域政策の策定も行っている。

そこから「オホーツクネットワーク」も生まれた。その活動は多方面にわたるが、第一には、「オホーツク青空市場」の試みに代表される産直の取り組みがある。これは産直に取り組むそれぞれの農家がバラバラな状況に対し、作り手どうしのつながりをつくりたいという要求、および遠い都市ではなく地域に住んでいる人たちに地域の農家がどのような農業をやっているのかを知ってもらうことを目的にしたもので、2000人を集める取り組みになっている。「青空市場」を通じて、農家と消費者、農家どおしの「顔の見える関係」が作られ、個々の農民も自分たちの取り組みが間違っていなかったという自信を持つようになった。

第二は「アレルギーネットワーク」の形成である。2市5町のアレルギーの子どもを持つ親の会

ネットワークの歩み

- 第1回例会 1991年5月24日 於：カトリック北見教会
 ◇「農業・健康・環境を考える」フリートーキング
- 第2回例会 7月1日 於：カトリック北見教会
 ◇「元気の出る玉ねぎづくり、土づくり」……伊藤秀幸さん（訓子府町 農業）
 ◇「乳幼児の健康状態」……長尾智美さん（常呂町 保健婦）
- 第3回例会 8月5日 於：カトリック北見教会
 ◇「道東初エコマーク粉せっけん製造を手掛けて」……笠原信春さん（北見市）
- 第4回例会 8月19日 於：北見市市民会館
 ◇「地域づくりネットワーク」……守友裕一さん（福島大学教授）
 ※北見地域調査研究会、オホーツク地域研究会と共催。
- 第5回例会 10月7日 於：カトリック北見教会
 ◇「消費者として農業に期待する」……小杉ゆう子さん（北見市 主婦）
- 第6回例会 12月2日 於：カトリック北見教会
 ◇「オホーツク青空市場をふり返って」……中西康二さん（訓子府町 農業）
 石橋義典さん（美幌町 農業）
- 第7回例会 1992年2月4日 於：カトリック北見教会
 ◇「無農薬ハト麦茶生産に挑戦」……石川國廣さん（網走市 農業）
- 第8回例会 4月7日 於：カトリック北見教会
 ◇「網走の水環境問題を考える」……坂崎繁樹さん（網走市役所水産漁港課）
- 第9回例会 1周年記念大対話 6月20日 於：訓子府町公民館
 ◇「食・土・ヒト みんな元気か」～農業の安全と信頼を考える～
 パネラー：金林隆幸（北見漁業卸売市場）、菊池一春（訓子府町教育委員会）、西山孝正（訓子府町 畜産農家）、小杉ゆう子（北見市 主婦）、石橋義典（美幌町 畑作農家）、黒瀧秀久（網走市東京農大講師） 司会：山本牧（北見市 北海道新聞記者）
- 第10回例会 オホーツク青空市場
 8月2日 於：北見市 ※2市6町から30軒の農家が参加
- 第11回例会 8月6日 於：北見市勤労者センター
 ◇「金沢の内発的発展からオホーツク地域は何を学ぶべきか」……佐々木雅幸さん（金沢大学教授）
- 第12回例会 オホーツク青空市場
 10月18日 於：北見市 ※2市6町から30軒の農家が参加
- 第13回例会 11月17日 於：カトリック北見教会
 ◇「作物の土壌病害について」……児玉藤不二雄さん（道立北見農学試験場 研究部長）
- 第14回例会 1993年2月25日 於：カトリック北見教会
 ◇「ヒグマの安泰はヒトの安心」
 ～オホーツクの自然環境デザイン～……山本牧さん（北見市 北海道新聞記者）
- 第15回例会 4月22日 於：カトリック北見教会
 ◇「グリーンハーベストの歩みと地域づくり」……小野寺俊幸さん（常呂町 農業）

を横につなぎ、さらに保健婦や保母とも協力している。230名を組織し、アトピーの人たちの悩みを解決するばかりでなく、農家や小売業者、学校給食などの関係者の認識を変えていく拠点ともなっている。

第三は地域産業づくりである。メンバーの農家は畑作3品(小麦、馬鈴薯、^{てんさい}甜菜)に続く第四の柱をめざしてハトムギの栽培にも着手し、お茶に加工したメンバーのスーパーで販売している。他にもハム・ソーセージの加工やひなどりから飼料まで自家生産した上での卵生産などの取り組みもある。

第四は粉せっけん製造機械を通じた仕事おこしである。全国でもAランクの技術をもつミヤデン化学に依拠して、石けん製造のプラントづくりに取り組んだ。これを通して仕事づくりに取り組んでいるが、これからの地域づくり・内発的発展にとって、機械が作っていくことは重要である。

さらにこの他にも、ネットワークのメンバーによる文化活動(陶芸家や音楽家を呼ぶなど)によって地域に貢献している。

21世紀を担う青少年の健全育成をめざして
—地域(市民)ぐるみの子育て運動の方針—
平間信雄/豊富町兜沼小中学校

稚内市には校長会やPTA連合会、青年会議所や新日本婦人の会、母と女教師の会などの23団体からなる子育て推進協議会があり、全市的な行事を開催している。これは13年間にわたり教育関係者が協同・共同してきた組織であるが、これだけでは協同・共同は継続しない。家庭・地域・学校が日常的に協力・共同しあえる関係—毎日の子どもたちの生活や悩みや発達とかかわって、どう協力・共同するかが最も大切である。

では子育ての協同・共同のテーマは何か。①まず授業がよくわからなければならぬ。ここでは教師が鋭く問われる。②次に家庭が生き生きしていなければならない。それは子どもの小さな悩み

に気づかないほど忙しくさせられている親の課題でもあるし、教育の専門家である教師はそれを直接援助する責任もある。③さらに地域の町内会や子ども育成会も、家庭や学校と互いに認めあい協同しあえば、より効果的な子育ての努力を实らせることができる。例えば町内会の七夕まつりに学校もかかわることは、子どもたちにとっても励ましとなる。

そのような活動を継続する単位が子育ての単位であり、それは地域の中での協力・共同の組織でもある。教師・親・町内会子育て担当者からなるこの組織を43の町内会で結成することに成功してきた。

その活動の中で私たちは次のことを大切にしてきた。①教職員組合の役割とのかかわりで、教育の主権者は誰なのかをはっきりさせてきた。主権者は父母、国民であることはわかっているが、実践的には「あの親にしてこの子あり」というようにわからなくさせられている。その問題点を浮き彫りにし、どんな親であれよくなるように援助するのが教員の役割であり、その過程を通して主権者が成長することを明確にした。②共同は画一化ではなく、各々の持ち味が確認された上での共同であること。教職員組合は独りよがりになりがちで、自らの教育観を熱っぽく語れば前進するような錯覚に陥りやすい。教育観の一致を前提とするのではなく、誰もが切実だと思っている問題から出発すること。理屈からではなく今すぐできることから出発し、また思想信条や政党支持の自由を保障する—ここからスタートすれば99%の父母が一致する。③子育て運動で確かめあわれたこと、みんなが大切と認めあったものを教育行政や学校に根づかせることを大切にしてきた。地域で先に運動を实らせ、それを行政に組み込ませるというスタイル。事実を通して生まれた財産にはほとんどの人が一致できる。

家庭・学校・地域は文部省でも強調しているが、問題はそれを本当に生かす下からの努力にある。それが変わった時に、教育荒廃は一步一步、地域から改善されていくのではないか。

豊かな地域生活の実現をめざして
—地域づくりに果たす施設の役割—

横井寿之／剣淵北の杜舎

西原学園は知的な障害を持つ人々の施設。剣淵町の西原小中学校が統廃合により閉校になることになったが、地域で反対運動がおこり、行政としても住民の要望に応えざるを得なくなった。そこで誘致されたのが西原学園であった。1980年に上川管内で最初の施設として開園した。

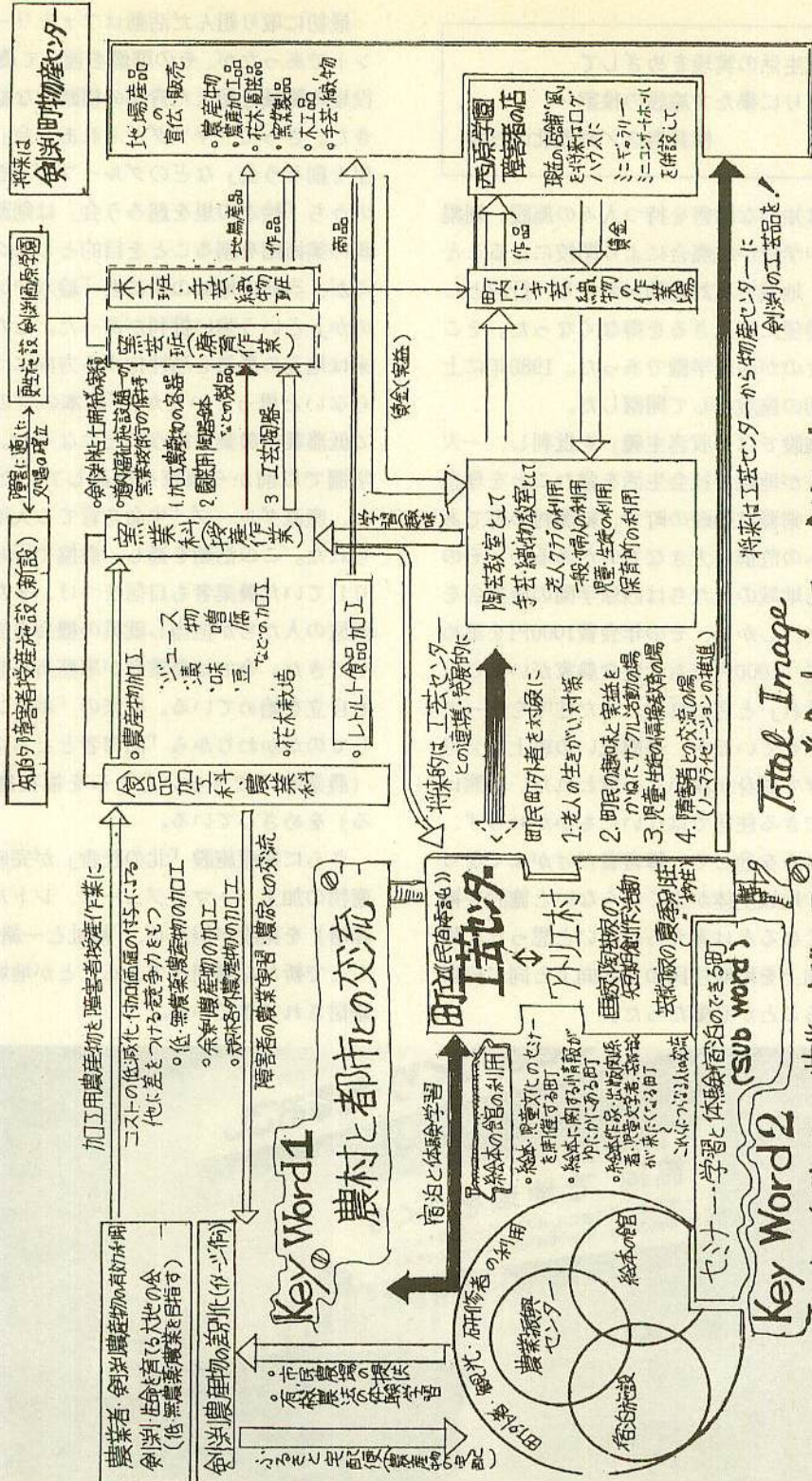
私たちの施設では「収容主義」を批判し、一人でも多くの人が地域で社会生活を営むことを理念としてきた。剣淵は過疎の町で、純農村の町であり、自由化への危惧は大きなものがあるが、そのような中でも地域の人たちは西原学園の後援会を作ってくれた。しかし、その年会費1000円を集めに回った時に「1000円でも大変な農家がいることをわかってくれ」と言われた。また住宅を作って園生を住まわせているが、退園祝いの席上で父母に「贅沢すぎて肩身が狭い」と言われた。実態は決して満足できる住居ではないにもかかわらず、である。これらを通じて、障害者だけがよくなってもダメで、地域全体がよくなると施設や福祉だけが良くなるとは考えられないと思った。障害者の福祉向上を地域住民の生活向上と同じ枠組みでとらえることが必要だった。

最初に取り組んだ活動はファミリー講演のイベントであったが、その準備を通して農協、商工会、役場の職域を超えた青年の横断的な結びつきができた。さらに「マツダとふれあう会」や「絵本の里を創ろう会」などのグループができてきた。そのうち「絵本の里を創ろう会」は剣淵に絵本の原画の美術館を創ることを目的としたグループであるが、当初は地域の中にも「絵本でメシが食えるのか」という強い批判があった。したがって、将来は地元の農業を活性化する方向につなげねばならないと思っていたが、「絵本の里の農業」として低農薬の農業を行うことになった。これに西原学園で以前から東京へ出荷していた販路を提供し、産直グループ「生命を育てる大地の会」が作られた。この活動を通し、農協や行政を批判ばかりしていた農業者も自信をつけ、また出荷作業は西原の人たちが担当し就業の機会を拡大することができた。今では農業者が事務所を設立し、彼らも自立を始めている。従来の「ボランティア」としてのかかわりから「障害者とともに歩む農業」（農業者のできないところを福祉施設が担当する）をめざしている。

さらに授産施設「北の杜舎」が完成し、地元農産物の加工（トマトジュース、レトルトコーン、味噌）を施設が担当し、「福祉と一緒に活動すること」で新たな展開ができることが地域の人々にも確信されてきている。



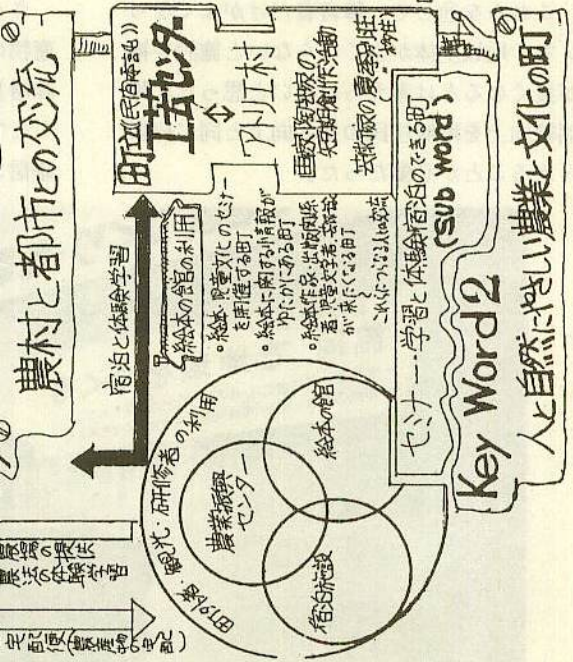
授産施設と地域や地場産との係わりに関する構想



西原学園作成 1991.5.15

将来は工場センターから物産センターに 創造の工場を!

Total Image 絵本の里の創造



道央市民生協と美々川せっけん

木村隆広／生活協同組合道央市民生協

1991年に90年代構想を策定し、生協の基本的役割は何かを問い直した。そこで「よりよい暮らしをつくる協同組合的共同社会をめざす」ことが提起され、「生協のための活動から地域をよりよくするための活動へ」、「一部の自覚的組合員の活動からみんなで一步を歩める運動に」、「批判と抵抗の運動から提案、創造の運動へ」という方針を確立した。単にモノを売るのではなく、生活のすべての分野で協同を広めていきたいという方針である。

とりわけ福祉については1988年に「街おこしと福祉の組合員大会」を開催し、翌年からは「街おこしと福祉の懇話会」で福祉関係者や地元企業、研究者などとともに生協の役割について検討会を重ねた。91年には第4回「街おこしと福祉の市民大会」を開催し、「街おこしはより大きな協同の心と行動をみんなの力でつくりあげていくこと」であると確認することができた。さらに92年には福祉施設の人たちや「お食事会」の参加者400人を招待した伊藤多喜雄のコンサートを地域の青年たちと一緒に成功させてきた。

環境問題についても90年に環境委員会が設立され環境問題学習が開始されていたが、翌年には自らの仕事から出てくる廃油に対し、事業責任を果たす方向の検討を開始した。

しかし、すでに今までの実践を通して、福祉と環境に対するものの考えかたができていた。産業廃棄物としての廃油のリサイクル、土や水の汚染防止、継続性のある障害者雇用の確保、社会福祉への貢献を生きがいの一つとしてとらえられる活動、「30歳（創立30年）の役割」を果たす、等々の考え方が生協の願いであり、組合員の思いであった。こうして技術的、経営的な障害も乗り越えて美々川福祉園との協同により、廃油リサイクルによる美々川せっけんが誕生した。このせっけんにはコープマークもつけていない。生協が自分の

名前を売ることを考えているのではないからだ。すでに計画を上回る生産を行っており、福祉園では園生10人の雇用を実現し、さらに園の大きな収入源ともなっている。また普及にかかわって消費者協会との連携もできた。

人間を大切にすることが福祉の基本であり、それは人間が生きていくために必要な多くのものを与えてくれる自然を大切にすることにもつながる。そして、この活動を通じて、施設で生活している人たちに、社会に貢献しているという実感も広がっている。

Ⅲ. 討論の概要

以上の報告の後に、木村純氏（名寄短大）と野村朋子氏（コープさっぽろ）からコメントがなされた。木村氏からは各々の運動の担い手としての地域住民、父母、組合員や施設がどのように成長し、かつ頑張れた条件は何か、という問いかけがなされ、野村氏からはコープさっぽろの実践とのかかわりで、各々の実践を生協がどのように受けとめるか、という対比の視点か示された。

まず、木村氏のコメントについて、川崎氏はネットワークの主体は農家であり、彼らのエネルギーに支えられたことを補足した。平間氏は、父母の目線から切り離された学校、地域から浮いた学校を地域にねざした学校にしていくことが課題であり、それは教師集団の努力をぬきにしては根本的な解決ができない問題であることが強調された。横井氏は、施設職員は厳しい労働条件の下で働きながらも、地域の人々が「単に農産物をつくるだけでなく、地域住民としての活動や福祉活動に参加する」ことや障害者が安心して暮らせるまちづくりを自覚することを目のあたりにし、励まされてきた、と発言した。道央生協の木村氏は、せっけんの開発にあたっては専従者がメニューを提供したが、サンプル実験やテストを通じ、最終的に選択・決定しているのは組合員であり、実際に普及にあたっては組合員であることを補足した。

野村氏のコメントにかかわっては、フロアとの

討論のなかで議論されたと言える。川崎氏は先の回答において「協同組合にはそれほど期待できない」と発言されたが、これをめぐって生協労組がその意味を問うた。これに対し川崎氏は、実際に農家が産直のように何かやろうとした場合、その試みに対し農協はどれほど援助できるかという点と難しい。加入率がどうこうではなく、生産者やアトピーの親のような消費者の思いを語れるような協同を広げていくことが重要だ、と回答した。

これに対し生協労組からは、協同組合はボランティア活動ではなく一つの事業としての協同運動であり、そこにそのような要素をどのように組み込んでいくのかをさらに問う必要があることが指摘された。

IV. まとめ

討論は十分に展開されずに終わったが、報告・討議を含めて、極めて豊富な論点が提示されたように思われる。最後に私が触発された論点を列挙してまとめにかえさせて頂きたい。

(1)協同運動と自治体（行政）とのかかわり

「地域で運動をやらせてから行政に要求する」という運動スタイルは、協同運動が決して行政の肩代わりではないことを示しているし、協同性の形成が新たな公共性を実現する条件であることをも示しているように思われる。

(2)地域づくりに果たす協同運動の役割

いずれの実践も福祉や教育の個別的な問題を解決するために、実は地域全体の問題を解決しなければならないことを発見した実践である。そのような統一的把握によって、地域づくりは豊かな内容を持ちうるし、「下から」のものとして定着しうる。そしてそのような統一的把握は協同運動を通して実現されているのである。

(3)協同組合運動と協同運動

報告された実践は協同組合形式をとらないものが多かったが、それは討論においても示されたように協同組合批判という実践的意義をもっている。それは同時に協同組合が新たな発展を実現する条件をも示すものであろう。

(4)ネットワーク化と地域政策づくり

単に学習活動による政策づくりのみでなく、ネットワーク化の実践によって、地域政策はより豊かな現実性のあるものになっている。それは地域計画をも策定しうる主体が形成されてくることをも意味していよう。

(5)技術開発の重要性

「せっけん」を通じた実践は、ミヤデン化学の独自技術がその成功の条件になっている。仕事おこしにおける技術開発の重要性をこれらの実践は示している。

参加者の感想

内田和浩 北大大学院

分科会では4本ものレポートがあり焦点が絞りきれず議論が散漫だったと思う。

「地域づくり」の捉え方は参加者それぞれ異なるイメージを持っており、各々の現在のとりくみもまちまちであろう。自治体レベルから、さらに広い範囲での「地域づくり」に向けての構造的視点を、主体に即して明確にしていく必要があると思う。

全体会での3本のレポートについて、時間の問題から議論ができなかったことは大変残念である。

○名札を各自がつけていた方がよかったのではないのでしょうか。いったいどのような人達が集まったのか分からないので…。

杉浦正人

第1分科会に参加して、剣淵の町おこしの実践が興味深かった。「絵本の里」の町づくりの理念の「内実」を実践によって、しかも施設をとりまく生産者、自営業者の共感を広げながら深めてきたことに感銘した。剣淵、稚内、北見のそれぞれの実践者が、①創造的な実践の積み重ねを最も大切にしていること、②地域づくりの主体としての人々が息づいていること、に勇気づけられた思いです。